OFFICIAL FREE FAN CLUB ショウ☆ケース TV ANIMATION スタミュ FC会報 2018 AUTUMN
第5号
ちびキャラ4コマ劇場
ショートストーリー【空閑 愁】
書き下ろし
ショートストーリー 第五回 書き下ろし
会報企画 みんなの「○○」を考えよう!
ちびキャラ 4コマ劇場
連載コラム 月皇海斗役 ランズベリー・アーサー

第5号

OFFICIAL FREE FAN CLUB

ショウ☆ケースTV ANIMATION

スタミュ FC会報 2018 AUTUMN

目次

ショートストーリー 空閑 愁

カフェレストランでのバイトを終えて店の外に出ると、吐いた息が薄っすらと白くなった条件反射で身震いをする。
夜の風が冷えてきた。
もう2学期も終わろうとしてるんだし、当然といえば当然だ。
次のバイト代が入ったら、バイク用のジャケットを買うか。

そう思ったが、やめた。
ついこの間まで、俺は夜のバイトを一時的に休んでいた。
母親がパート中に自転車で転倒して足を怪我したからだ。
自宅療養していたしばらくの間、俺は毎日、放課後には実家に帰って家事を手伝っていた。
数ヶ月前も綾薙祭のテストステージに向けてシフトを減らしていたし、今は使う時じゃねえ。貯める時だ。
そう納得して愛車のシートに跨ると――、背後から声が掛かった。

「うーわ……そんな寒そうなカッコでバイク乗るなよ」

気だるげな声の主は、この店のオーナー　兼　店長。
勤務時間中は雇い主然としていた口調が、退勤後は砕けたものになるのはいつものことだ。

「愁、お前、着るもんまでトラに取られてんじゃないだろうなあ」
「あいつはもっと洒落た服着てる」
取られてるんじゃなく貸してんだ、という訂正は端折ってそう答えると、「そりゃそーか」と言って笑った。

◆ ◆ ◆

チャラい俺の幼なじみが、ガキの頃から身に着けるものに拘るタイプだってことは、この人もよく知ってるからな。

「グローブくらい着けろよ。うちの大事なピアニストなんだから」
「ああ」
「せっかく何とかテスト、合格したんだろ？」
「テストステージ？」
「それそれ。風邪ひいてたらしょうがないぜ」
「ああ」
「じゃーな。お疲れさん」

「お疲れ様です」と返しきるのを待たず、オーナーはもう店の中に引っ込もうとしていた。
去り際に――、

「後ろ姿が親父に似てきたな」

そう言われた。
『親父』というのは俺の親父のことだ。

この人は親父のことを俺よりもよく知ってるんだな。

当たり前だが、今更そう思った。
俺は親父がバイクに乗ってる背中なんか知らねえ。
そもそも、俺が生まれてからはほとんど乗ってなかったらしい。
お袋曰く「ガキが出来たから無茶はしない」とか言って控えるようになったそうだ。
それでも売り払ったりせず、まめにメンテナンスをして大事にするほどには、愛着があったはずなのに。

親父は長生きしようと思ってたんだな。俺やお袋のために。
それは、叶わなかったわけだが……。

無意識に、そんな親父が愛した形見のバイクに目を落とす。
俺は親父のことをほとんど覚えていない。
物心つく前に死んで、まともな写真も残っていない。
俺の中にある親父の情報は、全て誰かから教えられたもんだ。
そのほとんどはお袋によるものだが――一度だけ、
オーナーが親父にまつわる話をしてくれたことがある。
本当に、たった一度だけ。
でもその日の出来事は俺の心に強烈に残っているし、
大切な思い出だ。

綾薙学園に入学して、あいつらと会って……余計にそう思う。

☆

中学に入って半年が過ぎた辺りだった。
学校の外でじわじわと広まっていた俺の噂が、校内でも影響を持ち始めた。

『よその中学の奴と喧嘩して、相手を病院送りにした』
『先輩を殴った』
『目が合ったらのされる』

――そういう類だ。

噂の発端には心当たりがあった。
その年の夏休み、俺と虎石は見知らぬ不良に絡まれて、
人生で初めて流血を伴う喧嘩をしたのだ。
理由は俺がガン飛ばしただの虎石が生意気だの、
イマイチ要領を得ないものだったが……。
どうやら俺たちには〝素質〟があったらしく、一応の白星デビューを飾った。
それ以来、何度かリベンジマッチを吹っ掛けられ、
その度に返り討ちにしていたら噂が噂を呼んで
地元のほとんどの不良が俺と虎石の存在を知るようになった。
さすがに相手を病院送りにした記憶はねえが、
『噂が一人歩きする』ってのはああいうことを言うんだろ。

とにもかくにも夏休み以降、俺と虎石の素行について
悪い噂が流れてるのは知っていた。
それがついに校内のヤバイ連中に火を点けて、
ある日、学校中の不良が俺と虎石のクラスに乗り込んでくるという事態に
発展したわけだ。

無関係のクラスメイトたちが教室から逃げ出しても
人口密度があまり変わらなかったことを考えると、
少なくとも二十人近くを虎石と二人で相手にしたんだと思う。
廊下で女は泣くわ男は腰抜かすわの大騒ぎ。
当然、教師たちの知るところとなり、勝負がつく前に体育教師の集団に
取り押さえられた。

「おー愁。男前になったじゃん」

保健室から出てきた俺を見るなり、
先に手当てを終えて待っていた虎石が言った。

「お前もな」
「冗談だろ？　どこの世界に鼻にティッシュ詰めたイケメンがいんだよ。
あ～今日のデートキャンセルだわ、マジ最悪」

お前はほんとそればっかだな、というツッコミは、
切れた口の端が痛いのでやめておく。

「なー」
「ん？」
「生徒指導からの伝言。オレら『一応』吹っ掛けられた側だから、自分で親呼べってよ」
「……吹っ掛けられた側なのに親呼ぶのかよ」
「ま、良くねえ噂たってたからな～。これを機に親御さん交えて指導ってことなんじゃ
ねえの？　マジ無駄だけど(笑)。オレに売られた喧嘩は買えって教えたの
母ちゃんだし、ウケるわ」
「……」

虎石が、俺の肩に腕を回してズシッと体重をかける。

「大丈夫だーって。オレらが地元の不良に挑まれまくってることはお袋さんも知ってん
じゃん。乱闘騒ぎくれえで今更オロオロしねーよ」

確かにそれは大丈夫だと思った。
お袋は流血や喧嘩とは無縁の人種だが妙に肝が据わっていて、
――いや、ボーっとしてるだけとも言えるが、
とにかく俺が初めての喧嘩で擦り傷作って帰宅した日も、
ショックで泣き出すなんてことはなかった。
俺の心配もしていたが、どちらかというと相手側の方をもっと心配していて、
「あんまりしないように」と釘を刺した上で、
「でも虎石くんが一緒なら安心」とズレたことも言っていたくらいだ。

ただ――この時間は、お袋はまだパート先にいる。

俺は、息子の喧嘩のことで親が学校に呼び出されるという事態について、
お袋がどう思うかより、お袋の職場の人間がどう思うかの方が気になった。

言葉を発しない俺に、虎石が「どーすんの……？」と聞いた。
俺はお袋のことは呼ばず、
叔父だと嘘をついて、オーナーを呼んだのだ。

☆

オーナーと初めて会ったのは、
俺がミュージカルに興味を持って、音楽にも関心を強めた頃。

小学校の音楽室で、掃除の時間にピアノに触るようになってから、
歌やダンスと同じくらいピアノが好きになった。
でも当然、家にはピアノなんかなくて、
バカでかい紙に自分で鍵盤を描いて練習していた。
よほど健気にでも見えたのか、お袋が連れて行ってくれたのが
オーナーの店――後の俺のバイト先だった。

グランドピアノを間近で見たのは初めてだった。
チビだった俺を抱いて椅子に座らせてくれて、好きにピアノを弾かせてくれた。
そして「こいつ才能あるな」と笑ってくれたのを覚えてる。
うちのお袋を名前に『ちゃん』付けで呼ぶから、何となく友達なんだなと思っていたが、
正確には親父の親友だった。
つまりお袋は『親友の彼女で後の嫁さん』だったということだ。

俺は、その息子。

親戚でもないのに、よくしてもらった。
暇さえあれば準備中の店に行ってピアノの練習をさせてもらったし、
虎石と一緒に飯を食わせてもらうこともあった。

男親がいない俺にとって一番身近な成人男性。それは間違いない。
とはいえ、ここまでの厄介ごとを押し付けるつもりはなかったんだが……。

☆

「まあそれはいーけど、あんま驚かすなよ」

生活指導の教師の前ではそれなりにシャキッとしてくれていた口調が、
学校を出るや否やいつもの気だるげなそれに戻った。

「……ごめん……」

なんとなくバツが悪くて顔を上げられないでいる俺の頭を、
オーナーはグシャグシャと撫でて「帰るぞ」と歩き出した。

そう言ったわりには、夕焼け色に染まった道を長いことぶらぶらしていた記憶がある。

その道すがら、俺は正直落ち込んでいた。
考えなしだった。
自分から喧嘩を吹っ掛けたことはない、向こうから絡んでくるんだ。
何もしなかったらやられっぱなしになる、虎石だけにやらせるわけにはいかねえ。
悪い噂なんか別に気にもならねえ。そう思っていた。
でも、俺のせいでお袋に迷惑がかかるかもしれねえ。そこに考えが及んでなかった。

「俺……何にも出来ねえガキだよな……」

気が付くと、そんなことを口走っていた。

前を歩くオーナーの足は止まる気配がなくて、
聞こえていなかったのかとホッとした矢先、
急に、こんな話を始めた。

「これは完璧に自論だけど、ガキの内は男はいくらでも喧嘩すりゃいいよ。
俺だってした。……お前の親父もだぜ？」

◆ ◆ ◆

「え」

初めて聞く話だった。

「強かったんだよ、あいつ。腕相撲だって何だって、仲間内で勝てる奴はいなかった。
だけど、自分から喧嘩売ることは絶対になかったよ。
一人で喧嘩することもなかった。ダチのためとか、そういう理由じゃないと」
「……」
「優しい奴だった。
情けねーけど、俺も含めて……葬式では大の男どもがわんわん泣いてたよ。
赤ん坊のお前を抱いたお袋さんが、笑って背中さすって励まして回ってた」

想像して笑いそうになる。
お袋は確かに、そういうところがあるからな。

「お袋さんは結構タフだよ。だから今は、頼って甘えりゃいーんだよ」
「！」
「お袋さんだけじゃない。お前が言ったみたいに、
ガキの内はやりたいように出来ないことなんか山ほどある。それでいい。
ピアノが弾きたきゃ、俺の店のをいつでも貸してやる。
強い奴に喧嘩売られたら、トラと戦えばいいし、
勉強が出来なきゃ、出来るダチを捕まえりゃいい。
落ち込んだ時は、励ましてくれるダチを見つけりゃいい。
その代わり、愁は愁の出来ることで返してやればいいんだよ。
不義理なことはせず、相手が困ってる時は手を差し伸べて守ってやること。
あの親父とお袋さんの息子なら、出来るだろ」

☆

大人は簡単に言ってくれるな。
そう思って、あの時は思わず笑ってしまった。

でも結局、
虎石とは、一緒にダンススクールに通うようになって落ち着くまで、
2人でいれば喧嘩は負けなしだった。

綾薙学園に入学して、
ちょっと口はうるさいが、勉強が出来て、大雑把な俺を見放さないダチが出来た。
ネガティブだけど料理が上手くて直向きで、俺も頑張らねえとと思えるダチが出来た。
軽口叩いてふざけ合える、だけどプロ根性が半端なくて尊敬出来るダチが出来た。
いつも楽しそうに笑ってて、どんな時も前を向いて進んでる、そういうダチが出来た。

オーナーが言ってたことが、今はよく分かる。
こいつらがいるから俺が今の俺でいられるんだって感覚。
こいつらのために俺は俺のやれることをしてやる――そういう気持ち。

ダチ、親友、仲間――それを大事にする術を、
俺はあの時、教わった。

それに気付いたと同時に……、
親父にもそういいダチがいたんだな、と、
顔も知らない父親に初めて親近感を覚えた気がしたんだ。

☆

「ただいま」

寮に戻って自室のドアを開けると、
ルームメイトの月皇以外に見知った顔が揃っていた。
もはやよくある光景だが、
バイクですっかり冷えた体がじわりと温まったのは、この人口密度のせいか？

「空閑、おかえり！」

◆ ◆ ◆

「おかえりなさいっ」

月皇よりも先に星谷と那雪が言う。
天花寺がタヴィアンの顎を撫でながら、太々しく「邪魔してるぜ」と言うのも
定番の流れだ。

「お疲れ。夕飯は賄いで済ませたか？」
「ああ、今日はそうした。
なんか盛り上がってるみてえだな。廊下まで星谷たちの声、聞こえてたぞ」
「やれやれ……ちょっとしたミラクルが起きたんだそうだ」
「ミラクル？」

「そう！」と勝手に説明の続きを引き継いだ星谷が、
俺に向けてババンとフェイスタオルを広げてみせる。
白地にピンクの水玉柄。
何が何だか分からねえ。とりあえず次の言葉を待ってみるか。

「このタオル！　オレたちの間を巡り巡ってここに辿り着いた
奇跡のタオルだったんだよ！」
「?? ……なんだそりゃ」
「あのねっ――」

那雪も興奮気味に声を上擦らせている。

「このタオル、僕が2年前に綾薙祭に行った時、
一緒にいたゆうきとつむぎに借りたものだったんだっ。
急に雨が降ってきて、近くのホールに避難して、
そしたら目の前に、僕よりずぶ濡れの男の子がいてねっ。
それで僕、その人にタオルを貸したんだっ」
「それが――オレだったんだよ!!」
「……え??」

「会ってたんだよ！　オレ、那雪と！　2年前の綾薙祭で！　憧れの高校生のこと見たあの日に！」
「はあ⁇」
「それだけじゃない」

星谷たちとは違って落ち着いた声色のまま、月皇が続ける。

「一度星谷から返却されたそのタオルは、同じ日、俺と辰己と中渡に貸し出されていた。俺は記憶になかったんだが、つい先日、辰己たちが返しそびれていたそのタオルを俺に預けたんだ」
「それを那雪の留守中にオレが預かって、何か見たことあるな～って思ってたら、天花寺がお茶こぼして！」
「アレはオレのせいじゃない」
「天花寺のせいじゃないけどこのタオルでお茶拭いて、洗ったままオレが那雪に渡すの忘れてて……」
「僕が見つけてビックリして……」
「今、全員の話を照らし合わせた結果、事実が判明した――というわけだ」
「なんか……すげえ、嘘みてえな話だな」
「だよね！　このタオル、2年前の綾薙祭からスタートして、オレ、月皇、天花寺って渡り歩いて那雪の元に返ってきたってことだよ⁉　スゴイ‼」
「そうだよねっ！」

星谷と那雪がタオルの両端を握って子供みたいにはしゃいでる。
天花寺も満更でもなさそうだ。
月皇は呆れ顔で、ため息交じりの笑みを零した。

「それ、」

ピンクの水玉を指さす。
星谷と那雪が首を傾げた。

◆ ◆ ◆

「そのタオル、貸してくれ。俺も使ったらコンプリートだろ」

一瞬、思考停止していた星谷の目が爛々と輝く。

「ホントだ‼　さっすが空閑、いいこと言う‼」
「はい！」

那雪に差し出されたタオルを「サンキュー」と受け取る。

「そっか、ここがこのタオルのゴール地点だったんだなあ。空閑でゴールなんてそれっぽくない？　空閑ってさ、なんかデーンと構えてみんなを待ち構えてて、来たら『よく来たな』って迎えてくれそうな安心感があるよね！」
「何だそりゃあ。薄ぼんやりしたコメントをするな野暮助」
「ふふふ」

手の中のタオルを見ながら、さて何に使うかと考えてたら、すぐ横に座っている月皇が言った。

「何となく柄じゃないな。お前からああいうことを言い出すとは」

そう悪戯っぽい笑みを浮かべて見せる。
「だな」と返しながら、俺はタオルを机の引き出しにしまった。

END

みんなの「○○」を考えよう！ ～那雪・空閑 編～

今回のテーマは『みんなの「意外な一面について」を考えよう』！ トークゲストはteam鳳の那雪くんと空閑くんです。

那雪：「よ、宜しくねっ」
空閑：「ああ」
那雪：「ふぅ……」
空閑：「ひょっとしてアガってんのか？」
那雪：「うん、少し……空閑くんと２人でこういう取材を受けることってあんまりなかったから、いつもと感じが違って緊張するな」
空閑：「大丈夫じゃねえ？　トークテーマあるしな」
那雪：「そうだねっ」
空閑：「始めるか」
那雪：「うん！　えーと『みんなの「意外な一面について」』って、team 鳳のメンバーのことでいいのかな」
空閑：「星谷のことだったら、一番知ってんのはやっぱ那雪だよな。いっつも一緒にいるし」
那雪：「そ、そうかな。う～ん……女の子の話題が苦手なのは、ちょっと意外だよね」
空閑：「あー、それ虎石もよく言ってるな。反応が初心だとか言って面白がってる」
那雪：「寮の共有スペースで、みんなでテレビ見てる時もね、ドラマとかでその……男の人と女の人の……」
空閑：「ラブシーンか」
那雪：「あわわっ、あ、あの、ハグとかだよっ？　そういうシーンになると、星谷くん逃げちゃうんだ」
空閑：「逃げる？」
那雪：「『宿題してくる！』とか言って出て行っちゃうんだよ（笑）」
空閑：「あいつ、中学までは共学だったんだろ。なんでそんなに女慣れしてねえんだ」
那雪：「友達は女子もたくさんいたみたいだよ。恋愛の話が苦手なのかな……。逆に天花寺くんは中学から男子校だったみたいだけど、女性の扱いに慣れてる感じがするかも」
空閑：「それも意外だよな」
那雪：「やっぱりプロの役者さんだからなのかな。歌舞伎のご贔屓って女性が多そうだもんね」
空閑：「妹１号２号のこともなんやかんや気にかけてるよな」
那雪：「そうなんだ。バレンタインのお返しとか、空閑くんと渋谷に行った時のお土産とか、いつも忘れずに買って来てくれて申し訳ないような気も……」
空閑：「好きでやってんだろ。気にしなくていいんじゃねえか？」
那雪：「う、うん（笑）。空閑くんは共学の中学校だよね？　何だか、女の子にどんな風に接してたのか想像できないかも」

空閑：「んー……あんまり喋ってねえかもな。別に話しかけてもこねえし」
那雪：「そうなの？　（怖かったのかな……）」
空閑：「星谷の話してたら天花寺の話になったな」
那雪：「そうだね(笑)。じゃあ次は、月皇くん？　空閑くんはずっとクラスも同じだしルームメイトだから、色々知ってるんじゃない？」
空閑：「んー」
那雪：「あ。甘い物が好きなところはちょっと意外だよね！　卵焼きも甘い派だし。あと駄洒落に弱いところも意外かも」
空閑：「正直……何が意外で何が意外じゃねえのか分からなくなってきてるな」
那雪：「あはは。一緒にいる時間が長くなるとそうなるね」
空閑：「こないだバイク雑誌見てた時、免許のこと聞いてきたのは『へえ』って思ったけどな」
那雪：「えっ！？　それは意外だねっ。月皇くん、バイクの免許取るのっ？」
空閑：「いや、車。俺もそっちは詳しくねえけど、教習所の雰囲気とか聞かれた」
那雪：「車の免許……それも十分意外かも」
空閑：「俺も取るぞ。高校卒業したら」
那雪：「そうなの？」
空閑：「お袋は免許持ってねえし、誰か持ってた方が便利だろ。中距離移動に自転車使われるの、正直心配だしな」
那雪：「ああ、ちょっとおっちょこちょいなんだっけ(笑)。確かに、自転車より安全かも。じゃあ、卒業したら月皇くんと一緒に教習所に通うのもいいね」
空閑：「座学で寝たらすげえ怒られそうだな」
那雪：「寝ない方がいいよっ？」

さて、那雪くんと空閑くんの『意外な一面』については、ある方にお聞きしています。

那雪：「ある方？」
空閑：「誰だ」

お２人の指導者の鳳樹くんです。

那雪・空閑：「！」
那雪：「空閑くん、こんなところに手紙が！」
空閑：「いつの間に」
那雪：「ここに僕らの意外な一面が書いてあるのかな。何だかちょっとドキドキするね……」
空閑：「でもまあ、自分じゃ分からねえしな。いいんじゃねえか？」
那雪：「う、うん。それじゃあ――」

（手紙を開封する那雪くん）

那雪：「えーと……『那雪の意外な一面は、酒乱なところ』。ええっ！？　どうして鳳先輩が知ってるのっ！？」
空閑：「星谷が喋ったんじゃねえか？」

那雪：「うう……」
空閑：「確かに、酔って暴れて記憶なくすとか……意外だよな。そういう酔い方する奴に見えねえし」
那雪：「僕、大人になってもお酒は一滴も飲まないようにするよっ」
空閑：「その方がいいかもな。アルコール入りの菓子とかでそんななんだろ？　普通に飲んだら取り返し付かねえことしでかすかもだしな」
那雪：「ひぃ……」
空閑：「俺のは？」
那雪：「ああ、えーとっ『空閑の意外な一面は、長風呂なところ』。鳳先輩、どうしてそんなこと知ってるんだろう……」
空閑：「夏合宿やった時、風呂が一緒になることがあった」
那雪：「ああ……！　確かに空閑くん、イメージよりもお風呂長いかもしれないね。何となく短そうだから」
空閑：「実家では短えけど、寮とか柊先輩の家の別荘は広い風呂だからゆっくりだ。なんか銭湯みてえで、すぐ上がるの勿体ねえ気がする……」
那雪：「ふふふ」
空閑：「鳳先輩は意外と上がるの早かったぞ。湯船になんか１分も浸かってねえんじゃねえか？」
那雪：「ええっ。それは……意外だね」
空閑：「じっとしてられねえのかもな。湯船浸かってる時も、歌いながらタオルでクラゲ作ったり、すげえ落ち着きなかった」
那雪：「意外だね……(汗)。だけど鳳先輩って普段は大人っぽくてカッコいいイメージだから、そういう一面もあるんだって思うとちょっと安心しちゃうかも」
空閑：「だな」

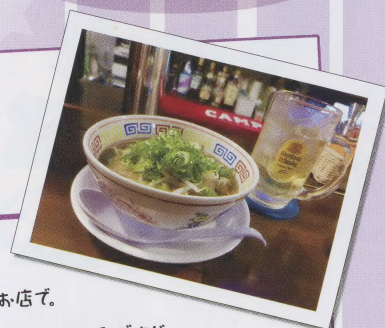
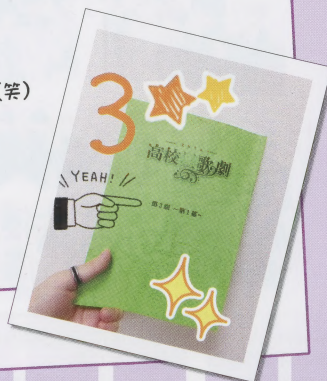
鳳くんに確認したところ「まったりするのは好きだけど、お風呂は苦手なんだよね(苦笑)。のぼせるしさ」だそうです。
以上、『みんなの〇〇を考えよう！』のコーナーでした。

みんなの「意外な一面について」結果

星谷：女の子の話題が苦手
那雪：酒乱なところ
月皇：車の免許をとりたい
天花寺：女性の扱いに慣れてる
空閑：長風呂なところ
鳳：お風呂は苦手

☆ちびキャラ４コマ劇場☆

月皇海斗役 ランズベリー・アーサーの書き下ろしコラム

皆さんこんにちは！ ランズベリー・アーサーです。

今年も夏らしい事をほとんどやらぬまま2018年の夏を終えてしまいましたが、
そんな私が最近ハマっているのが一人飲み！ 一人といっても、家ではなくてちゃんとお店で。
元々お酒に強くて飲んでも酔わないので、家かお店か関係なく、一人で飲む事は一切なかった私ですが、
最近は仕事終わりに行った事のないアットホームな雰囲気のお店や飲み屋さんに飛び込んでみて、
気が付いたら他の席のおじさん達との話に花が咲いている。という感じの生活を送っています。
元々『人と会話をしたり遊ぶのは好きだけど一人行動が好き』という性格なので、
この一期一会な感じがなかなかどうして楽しく……。
知らない人と話すと色々な刺激があるので、日々新鮮な気持ちで過ごせています。
いつか『行きつけの店がある』という大人なフレーズを、自分が言う日がくるのでしょうか（笑）
ちょっと早いですがスタミュ三期のアフレコも始まりまして、
またスタミュカンパニーの皆に会えるのが凄く嬉しい！
アニメもミュージカルも海斗をやらせてもらえて、スタミュな日々はまだ終わらない！
早くまた皆さんとどっちの綾薙学園でも会えますように！ またね！

スタミュ

高校星歌劇

そして、星谷たちの歩む道は——続いていく。

TVアニメ第3期
2019夏放送決定！

★2018年10月24日 OVA スタミュ in ハロウィン発売！
★2019年1月23日 ミュージカル「スタミュ—2ndシーズン—」Blu-ray&DVD 発売決定！
★2019年1月下旬 ミュージカル「スタミュ」スピンオフ SHUFFLE REVUE 公演決定！

「スタミュ」公式ファンクラブ 星箱（ショウ・ケース）

入会費＆年会費無料で
お得な特典や情報が盛りだくさん♪

星箱アプリは、「スタミュ」の情報発信はもちろん、ポイントを貯めることでアプリ限定のスペシャルコンテンツをお楽しみ頂けたり、アプリ内でスタミュ関連商品のショッピングを行えたりと、お得な機能が盛りだくさん♪ 随時サービス追加予定。是非ご期待ください。

大人気コンテンツ、スタミュ公式FC「星箱(ショウ・ケース)」ラジオでは、
お便り(メール)を募集しております！

アプリ内 マイページの「お問い合わせ」より、件名を【「星箱（ショウ・ケース）」ラジオ宛】にして頂いてお送りください。

現在は以下のメールを募集しております。

・普通のお便り ・この人に聞いてみたい！

など、スタミュに関して知りたいことから日常の疑問まで受け付けています！

公式HP http://hstar-mu.com　公式Twitter @hstar_mu